

心理臨床家の専門家としての発達に関する研究 (1)

日本語版スーパーヴァイジー職業的発達尺度 (Supervisee Levels Questionnaire) 作成の試み

上村恭子・小海富美代・井出尚子・箕浦亜子・高下梓・田淵尚子・須佐祐子

明星大学 心理相談センター

キーワード：スーパービジョンの発達モデル、心理臨床家の職業的発達、臨床心理士の実習と訓練

要約

本研究の目的は心理臨床におけるスーパーヴァイジーの職業的発達レベルを測定する質問紙、「スーパーヴァイジー職業的発達尺度」を日本の訓練生に実施し、信頼性と妥当性を検証することである。「スーパーヴァイジー職業的発達尺度 (SLQ-R)」は、Stoltenberg & Delworth (1987) の統合的発達モデル (Integrated Development Model (IDM)) を実証するために開発された尺度であり、McNeill, et al. (1992) に信頼性と妥当性が立証されている。筆者らはこの尺度を日本語に翻訳し日本語版 SLQ-R を作成した。調査は国内の 16 の臨床心理士指定大学院に在籍及び、卒業後 10 年以内の者に対してランダムに実施し 165 名から有効回答を得た。日本語版 SLQ-R の α 係数は .92 であった。回答者を訓練歴によって 3 群に分け、訓練歴が日本語版 SLQ-R の得点に及ぼす影響を見たところ、訓練歴が長いほど SLQ-R の得点が高くなることが実証された。

問題と目的

明星大学心理相談センターは臨床心理士を目指す大学院人文学研究科心理学専攻臨床心理学コースの教育研修機関として、また、地域に貢献する相談機関として 2001 年に設立された。設立から 11 年が経過し、大学院修了生は 130 名を超え、様々な心理臨床の現場で活躍している。

筆者らは心理相談センターの専任相談員として相談業務に携わると同時に、当センターで実習を行う大学院生のスーパーヴィジョンも担当している。1995 年に開始されたスクールカウンセラー事業等を通して、臨床心理士の社会における認知度が上がるにつれ、その質の向上が大きな課題となっており、臨床心理士養成のための大学院におけるスーパーヴィジョンの重要性もますます増加しているものと思われる。近年、日本心理臨床

学会や臨床心理士資格認定協会主催の研修会で、スーパーヴィジョンをテーマにした発表や研修が数多く見られるようになっているのも、臨床心理士養成におけるスーパーヴィジョンの重要性の表れであろう。

大学院時代に受けるどのようなスーパーヴィジョンが、その後の心理臨床家の専門家としての職業的発達に有効なのだろうか。もちろん、大学院に入学してくる学生のバックグラウンドは様々であり、そのスーパーヴィジョンにおいても個別性が重要であることはいうまでもないが、心理臨床家の専門家としての職業的発達を考える時に、初学者のスーパーヴィジョンにおいて重要な視点は何かなるものであろうか。心理臨床家としての職業的発達段階に応じたスーパーヴィジョンのあり方を示す実証的な指針がないものだろうか。

筆者らはこのような疑問にたち、スーパーヴィジョンに関する国内外の文献を集めたが、日本国内におけるスーパーヴィジョンを取り上げた研究は実態調査や事例研究が多く、実証的な研究は少ない。その中で金沢（2002）は、心理臨床家の職業的発達モデルとして Stoltenberg と Delworth が 1987 年に発表した統合的発達モデル（Integrated Development Model [IDM]）を紹介し、心理臨床家の職業的発達段階と各段階に応じたスーパーヴィジョンの方法について示している。また、「心理臨床家の職業的発達に関する調査」を実施し、学会発表を行っている（金沢・岩壁, 2006 a）。

一方、海外のスーパーヴィジョンに関する研究は数多くまた多岐にわたっているが、大別すると、スーパーヴィジョンそのものについての理論研究と、心理臨床家の職業的発達についての理論研究とに分けられる。心理臨床家の職業的発達段階と各段階で求められるスーパーヴィジョンの特徴についてはこれまで盛んに研究されている（Worthington, 1987）。その中で、Stoltenberg と Delworth の統合的発達モデル [IDM] は、初学者に焦点を当てたモデルである点、また「もっとも多くの実証的研究に晒されてきたモデルであり、もっとも支持されたモデルといえる」（金沢・岩壁, 2006b）点が大きな特徴である。

IDM の中で Stoltenberg と Delworth（1987）は、心理臨床家の職業的発達をレベル 1 からレベル 3 までの 3 段階に分類し、それを査定する指標として「自他の気づき」、「モチベーション」、「自律性」の 3 領域をあげている。「自他への気づき」とは、セラピストの自己没入の程度、クライアントへの理解と認識の指標であり、「モチベーション」は、心理臨床家としての訓練や実践に向ける関心、意欲、努力を反映する。「自律性」はスーパーヴァイザーや他の権威からの自立への欲求と自己効力感を示す指標である。

IDM によると、心理臨床家はレベル 1 から 2、

さらに 3 へと職業的発達を遂げていくが、レベル 1 は大学院レベルの理論と入門的な技術の習得に限定された初心者段階であり、学部を卒業したものを想定している。彼らは、忠実に教えられた技術や知識を活用し実行することに専心しがちであり、クライアントの視点を考慮することや、クライアントへの共感やクライアントに対するセラピストの感情的、認知的反応に気づきにくい傾向がある。一方、モチベーションは高く、熟練した臨床家になりたいという強い欲求を持っている。また、レベル 1 の臨床家は、知識や経験の不足から、全面的にスーパーヴァイザーに依存する傾向が強い。

レベル 2 では大学院修了者を想定しているが、セラピストの自己没入が減少し、クライアントへ注意を向けられるようになり、クライアントの世界をより深く理解し始める段階である。セラピーがうまく進めば臨床家としての自信を深めることになるが、時には感情的に圧倒され、セラピストの不安や無力感が高まる場合もある。これらは心理臨床家としてのモチベーションを揺らがせることにもなりえる。また、スーパーヴァイザーへの依存は、臨床家としての自信と自己効力感の高まりと共に依存—自律の葛藤を形作る。

レベル 3 は、より安定し自律的で内省的なセラピストとして存在する段階である。レベル 1 で見られる自己没入ではなく、より洞察に満ちた自己認識を持ち、安定した高いモチベーションを維持し、自身の臨床の仕事への責任を持続ける。他人に簡単に影響されることが減り自律的である。

McNeill, et al.（1992）はこの IDM の理論に基づいて「SLQ - R（Supervisee Levels Questionnaire - Revised）」を開発し、その検証を行っている。アメリカ国内の異なる 8 カ所の訓練施設でトレーニングを受けている多様な学歴およびカウンセリング歴、スーパーヴィジョンを受けた経験を有するセラピスト 159 名に調査

を実施し、訓練歴とセラピストとしての職業的発達レベルとの関連を調査した。被験者をカウンセリングの経験、スーパーヴィジョンの経験、学歴から「初級訓練者」、「中級訓練者」、「上級訓練者」に分類し、SLQ-Rの得点との関連を論じている。この研究では、訓練歴とカウンセリング経験の量とで分類されたグループ間で、明らかに尺度の得点の違いが認められており、SLQ-Rの妥当性が示唆されている。

本研究は、このIDMの職業的発達モデルに基づいて作られた「SLQ-R」の日本版を作成し実施して、その信頼性・妥当性を確認することを通して、IDMにおける心理臨床家としての発達モデルが日本でも有効であるかを検討するものである。

方法

調査内容

質問紙による調査を実施した。内容は以下の4点である。

① 日本版 SLQ-R

Stoltenberg と McNeill (1992) が作成した SLQ-R を筆者らで原文に忠実に和訳し、バックトランスレーションを行った上で日本語版を作成した。

原著の尺度は3因子で構成され、①自他への気づき(12項目) ②モチベーション(9項目) ③自律性(9項目) となっている。日本版もこの3因子を継承した。項目数は30あり、「まったくない」から「いつもそうである」までの7件法で回答を求めた。得点が高いほど、IDM (Stoltenberg & Delworth, 1987) における発達モデルでいうところの、高いレベルにあることを反映している。

② 大学院時代のスーパーヴィジョン経験の満足度

大学院時代に受けていたスーパーヴィジョンについて、先行研究を参考に「技法の習得」、

「ケースの見立てや理解」、「自己理解」、「臨床の仕事への理解」、「心理的サポート」の5項目についてそれぞれの満足度について7件法で回答を求めた。

③ 大学院時代に受けたスーパーヴィジョンについての自由記述

④ 基礎情報

性別、年齢、大学院教育年数、カウンセリングの経験年数、スーパーヴィジョンを受けた年数、スーパーヴィジョンの構造、主な職域。

本邦では日本版 SLQ-R の作成とその検証について論じるため、①④の回答のみ検討している。②、③については本論文の分析対象ではないため論じない。

調査協力者

調査対象は、臨床心理士指定大学院に在籍及び、卒業後10年以内の者とした。筆者らの所属する明星大学大学院人文学研究科臨床心理コースの在籍者と修了後10年以内の修了生62名及び、調査協力依頼を承諾した16校の1種認定大学院の在籍者及び修了後10年以内の者116名、計178名である。

調査手続き

質問紙の他に、依頼文、返信用封筒を同封したものを1セットとし、明星大学在籍者及び修了者には個別に郵送し、他大学については学内実習機関や教員宛に必要な数をまとめて郵送し、協力者に配布してもらう形式を取った。回収は協力者個人が個別に直接郵送する形式を取った。

調査時期

質問紙配布時期は2012年12月から2013年2月、回収時期は2013年1月から3月であった。

分析

210通が回収され、その内有効回答は178通

であった。(有効回答率 84.8%) 内訳は、女性 135 名、男性 43 名、大学院在籍者が 80 名、修了者が 98 名であった。このうち、個人スーパーヴィジョンを受けた経験のある者 165 名が今回の分析の対象となっている。

分析対象者の性別内訳は、男性 39 名、女性 126 名であった。年齢は平均 29.8 歳、標準偏差 7.38、レンジは 23-62 歳であった。調査時の学歴は修士 1 年在学中 13 名、修士 2 年在学中が 59 名、修士過程修了生 71 名、博士過程在学中 19 名、博士課程修了生 3 名であった。

分析対象者は、在院年数+臨床経験期間(半年で 1 ポイント)+個人スーパーヴィジョン期間(半年で 1 ポイント)の和を求め、「訓練歴」という変数にし 3 群に分類した。「訓練歴」の算出法は McNeill et al. (1992) に従った。McNeill et al. (1992) では、5 ポイントで初級訓練者と中級訓練者を 8 ポイントで中級訓練者と上級訓練者を分けた。その結果、「より幅広い対象で調査が必要」「我々が初級、中級と考えるグループについての仮説はきわめて限定的」と考察している。これを受けて、訓練歴の幅をより広くとることとして訓練歴スコアが 9 未満の 59 名を「初級訓練者」、9 以上 16 以下の 49 名を「中級訓練者」、17 以上の 56 名を「上級訓練者」とした。

「自律性」の 2 項目で総得点(30 項目)との間に 1%水準の有意な相関を認めなかったため、この 2 項目を除き全項目 28 項目、「自律性」の下位尺度は 7 項目とした。

Ⅲ 結果

本研究の目的は、SLQ-R の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。各項目、各訓練歴グループの得点および標準偏差を表 1 に示した。

(表 1)

信頼性について

α 係数は、28 項目全体で .92、「自他への気づき」.91、「モチベーション」.74、「自律性」.69 であった。

妥当性について

日本語版 SLQ-R の妥当性を評価するため、McNeill et al. (1992) と同様の手順で検証を行った。訓練歴に基づき初級、中級、上級の 3 群に分けた各群の総得点、下位尺度得点の平均と標準偏差は表 2 の通りである。訓練歴グループ間で SLQ-R 下位尺度の得点に差があるかを検討するために、訓練歴グループを独立変数とし、SLQ-R の下位尺度を従属変数とした多変量分散分析を行った。その結果、訓練経験の効果が有意にみとめられた $F(6,318) = 9.99, p < .001$ (Hotelling トレースの検定)。訓練歴グループを独立変数とし SLQ-R の総得点を従属変数とした、一元配置分散分析でも、訓練経験の効果は有意が認められた ($F(2,162) = 24.87, p < .001$)。 (表 2)

SLQ-R の下位尺度および総得点は、訓練経験が初級、中級、上級と増えるに従い高くなるか、多重比較検定(テューキーの HSD 検定)をおこなった(表 3)。SLQ-R の下位尺度「自他への気づき」「自律性」では、訓練経験が初級、中級、上級と増えるに従い高くなるのが 1%水準で有意にみとめられた。「モチベーション」に関して初級訓練者と上級訓練者、中級訓練者と上級訓練者との比較では、より訓練を受けた群の得点が高くなるのが 1%水準で有意に認められたが、初級訓練者と中級訓練者との差では認められなかった。 (表 3)

Ⅳ 考察

信頼性については、下位尺度「自律性」を除いて α 係数が .92 ~ .74 とおおむね内的一貫性を有しているとの結果であった。低い値 ($\alpha = .69$)

表 1 日本語版 SQL-R の項目と訓練歴グループの得点と標準偏差

		初級訓練者		中級訓練者		上級訓練者		全体	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
「自他の気づき」(12 項目)									
1	カウンセリングやセラピーのセッション中、心からリラックスして落ち着いている。	3.39	1.40	3.78	1.16	4.02	1.49	3.72	1.39
3	カウンセリングやセラピー中に、ありのままの自分でいながらも、適切な行動をとることが出来る	3.39	1.03	3.88	1.17	4.35	1.13	3.87	1.17
5	人間の行動に関する一貫した自分の理論をクライアントに対して用いることが出来る。	2.81	1.35	3.35	1.36	3.95	1.26	3.36	1.40
9	クライアントに向き合っている時、落ち着いた気持ちでいる。	4.36	1.24	4.49	0.96	4.93	1.02	4.59	1.11
10	カウンセリングやセラピー中、全体的な流れに沿った介入をしようとするよりも、次の応答をどうするか考えていることが多い。R	3.92	1.60	3.55	1.44	2.86	1.30	3.44	1.52
13	カウンセリングやセラピーのセッション中、自分自身がちゃんと出来ているかに気を取られて、集中することが難しい。R	2.90	1.36	2.65	1.27	2.18	0.89	2.58	1.22
24	クライアントの価値観を理解出来つつも、彼らが他の価値観を客観的に評価することを助けることが出来る。	3.07	1.14	3.33	0.97	4.25	1.15	3.55	1.21
26	クライアントに共感しながらも問題解決に焦点を当てる手伝いが出来る。	3.12	1.05	3.73	1.08	4.49	1.15	3.78	1.23
27	クライアントの感情に共感しながらも問題解決に焦点を当てる手伝いが出来る。	2.56	0.93	3.14	1.00	3.84	1.03	3.18	1.12
28	私自身がクライアントに与える影響を適切に判断することが出来、それを治療的に使うことが出来る。	2.63	0.96	3.27	1.04	3.88	1.21	3.25	1.19
29	一貫した専門家としての客観性と、クライアントに過度に巻き込まれることなく、カウンセラーとしての役割の中で仕事をする能力を示していると思う。	2.85	1.17	3.53	1.21	4.35	1.13	3.57	1.32
30	一貫した専門家としての客観性と、クライアントに過度に距離をとり過ぎることなく、カウンセラーとしての役割の中で仕事をする能力を示していると思う。	3.24	1.14	3.67	1.05	4.44	1.17	3.78	1.23
「モチベーション」(9 項目)									
7	仕事の全般的な質が、ある日はうまくいく、ある日は行かない、というように変動する。R	3.49	1.34	3.65	1.35	2.91	1.33	3.34	1.37
8	クライアントへの対処方法について、かなりスーパーヴァイザーに頼っている。R	3.78	1.54	3.29	1.21	2.95	1.38	3.35	1.43
11	モチベーションは日によって変動する。R	3.31	1.48	3.22	1.40	2.58	1.05	3.03	1.35
15	時々、クライアントの状況があまりにも絶望的に思え、何をすべきか分からなくなる。R	2.64	1.27	3.00	1.29	2.82	1.07	2.81	1.21

		初級訓練者		中級訓練者		上級訓練者		全体	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
18	時々、自分はどのくらいカウンセラーやセラピストに向いているのが疑問に思う。R	4.56	1.59	4.73	1.60	3.63	1.42	4.29	1.60
20	時々、カウンセリングやセラピーはあまりにも複雑過ぎて、その全てを学ぶことは決して出来ないだろうと思う時がある。R	4.66	1.59	4.45	1.67	3.98	1.66	4.36	1.66
21	カウンセラーとしての自分の長所と短所を十分知っている、自分の専門家としての可能性と限界が分かっていると思う。	3.03	1.26	3.47	1.34	3.39	1.22	3.28	1.28
23	自分自身をよく分かっている、それを自分の治療スタイルの中に統合することが出来ると思う。	2.71	0.98	3.08	1.26	3.60	1.35	3.13	1.25
25	クライアントの価値観を理解出来る、彼らが他の価値観を客観的に評価することを助けることが出来る。	2.97	1.38	3.33	1.27	4.33	1.34	3.55	1.45
「自律性」(7項目)									
2	スーパーヴァイザーの最小限の助けのみで、カウンセリングの録音テープを批評し、洞察を得ることが出来る。	2.75	1.58	3.10	1.43	3.46	1.52	3.10	1.54
4	さまざまなタイプのクライアントと、治療関係を築くことに自信がない。R	4.29	1.44	3.92	1.22	3.23	1.24	3.81	1.38
6	物事が計画通りにいかない時に困惑したり、不足の事態に対処する自信を欠いたりしがちである。R	4.19	1.57	4.16	1.51	3.51	1.28	3.95	1.48
12	時々、カウンセリングやセラピーのセッション中に、スーパーヴァイザーが手を貸してくれたらなあと思う。R	2.59	1.60	2.47	1.36	2.26	1.45	2.44	1.48
17	今現在、自分自身の専門家としての成長状況を考えるとスーパーヴァイザーからの助言がいつ必要で、いつ必要でないかを判断できる。	3.00	1.49	3.61	1.44	4.51	1.28	3.70	1.54
19	カウンセリングやセラピーに関して、スーパーヴァイザーを教師や指導者と見て見ている。R	4.81	1.82	4.20	1.62	3.88	1.64	4.31	1.74
22	カウンセリングやセラピーに関して、スーパーヴァイザーを仲間や同僚として見ている。	1.76	0.95	2.65	1.27	2.39	1.25	2.24	1.21

Rは反転項目を表している。表記された得点は反転後のもの。

表 2 日本語版 SQL-R の各訓練歴グループの得点

	初級訓練者 (N=59)			中級訓練者 (N=49)			上級訓練者 (N=57)		
	平均	標準偏差	レンジ	平均	標準偏差	レンジ	平均	標準偏差	レンジ
「自他の気づき」	40.59	8.64	19-61	45.95	9.20	30-63	53.46	9.84	34-71
「モチベーション」	34.27	6.46	22-49	35.53	6.05	24-53	40.44	7.44	22-53
「自律性」	23.63	6.12	8-36	26.61	5.47	16-40	29.47	5.45	16-41
総得点	98.49	18.70	60-141	108.10	18.21	76-149	123.37	20.28	79-160

表 3 日本語版 SQL-R の訓練歴グループ間の差の検定

	初級と上級			初級と中級			中級と上級		
	df	t 値	有意確率	df	t 値	有意確率	df	t 値	有意確率
「自他の気づき」	114	7.49	0.000	106	3.12	0.001	104	4.03	0.000
「モチベーション」	114	4.77	0.000	106	1.04	0.151	104	3.68	0.000
「自律性」	114	5.43	0.000	106	2.65	0.004	104	2.69	0.004
総得点	114	6.87	0.000	106	2.69	0.004	104	4.05	0.000

を示した下位尺度「自律性」の α 係数は先行研究 (McNeill et al.1992) でも .64 であり、翻訳による問題ではなく項目自体に再考の必要があると考えられた。妥当性の検証では訓練歴が増えるほど得点が高くなるという結果であった。先行研究 (McNeill et al.1992) で対象とした訓練生に比べ、本研究では、対象の訓練歴の幅、人数ともに大きくなっており、より明確な差が現れた。

ほぼ大学院修士課程修了を目安とした訓練歴ポイント 8 を区切りとした結果、初級と中級の間で、総得点、「自他への気づき」「自律性」に、1%水準で中級訓練者の得点が有意に高いと認められた。しかし、「モチベーション」には初級と中級で有意な差を認めなかった。おおむね臨床歴 6 年以上が相当する訓練歴ポイント 17 を区切りとした中級訓練者と上級訓練者の間では、すべての尺度で 1%水準で有意な差が認められた。SLQ-R 日本語版の総得点はおおむね訓練歴を反映し、長く研修をつんだ訓練者ほど高い得点を示す結果が得られた。

「自他への気づき」「自律性」の下位尺度得点は訓練歴が増えるに従って増加する傾向があった。「モチベーション」の下位尺度は初級訓練者と中級訓練者との間で差を認めなかった。「仕事の全般的な質が、ある日はうまくいく、ある日はいかない、というように変動する。(Q7 反転項目)」「時々、クライアントの状況があまりにも絶望的に思え何をするべきか分からなくなる (Q15 反転項目)」「時々、自分はどのくらいカウンセラーやセラピストに向いているのか疑問に思う。(Q18 反転項目)」の項目で初級訓練者が中級訓練者よりも低い得点となった。また「カウンセラーとしての自分の長所短所を十分知っているの、自分の専門家としての可能性と限界がわかっていると思う。(Q21)」では上級訓練者が中級訓練者よりも得点が低くなった。(表 1)

「モチベーション」尺度は、モチベーションの高低と安定度を測ることが目的である。今回の調

査ではまだ経験の少ない初級訓練者よりも、臨床経験の増えた中級訓練者で、自分の仕事の質のムラや、無力感、職業適性への疑念を強く持つ傾向がみられ、モチベーションの安定度という点では初級訓練者と中級訓練者に差がなかった。このことは、IDMで論じられている、レベル2（大学院修了者を想定）のスーパーヴァイザーが経験によって不安や混乱に陥る傾向と一致している。

日本語版 SLQ-R はおおむねスーパーヴァイザーの職業的発達レベルを測定する尺度として信頼性妥当性を認めることができた。しかしモチベーションに関しては修士課程修了までの初級者と修了後5年程度の中級者を区別することができなかった。これらの結果から、大学院修士課程に在籍中の訓練歴の浅いスーパーヴァイザーは、訓練を積んだスーパーヴァイザーに比べ、より自己没入しやすく、クライアントの世界や自己認識等が低く、よりスーパーヴァイザーに依存的で自律性に乏しいことが明らかとなった。一方で大学院修士課程修了後1～5年程度のスーパーヴァイザーと比較するとモチベーションの点で差がないことがわかった。

今後の課題

- ① 今回の結果で SLQ-R が訓練歴を反映することは分かった。しかし今後 SLQ-R を実際のスーパーヴァイズに生かすには、SLQ-R の得点からそのスーパーヴァイザーが IDM の3つの発達段階のどこに該当するのかを明確にする必要があるだろう。また、下位尺度として IDM 理論で想定された3つの要素をそのまま尺度としているが、因子分析を用いてその妥当性を検討する必要がある。
- ② 項目の下位尺度への分類は原著に従ったが、項目の内容と一致しないものもあった。またセッションの録音テープを使っているスーパーヴァイズについての項目があったが、日本で行われているスーパーヴァイズの現状と必ずしも

一致しないと考えられた。日本で活用可能にするには更に項目の検討が必要と考えられる。

- ③ SLQ-R で測定されるスーパーヴァイザーの職業的発達レベルと、スーパーヴァイザーのスーパーバイズ体験がどのようなものなのか。どのようなスーパーヴァイズの体験が職業的発達を促進するのかについて、質的な検討を含めた分析が求められる。

文献

- Bencivenne, J.C., (1999) .An Investigation of Professional Supervisor And Supervisee Development. <http://scholarship.shu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1219&context=dissertations>. (2012年9月17日取得)
- 金沢吉展 (2002) . 臨床心理学における心理療法の教育の目標、方法、および今後の課題 . 精神療法, 28, 410-418.
- 金沢吉展・岩壁茂 (2006a) . 心理臨床家の職業的発達に関する研究から：(1) 臨床家としての自己評価に影響を与える要因について . 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集, 234.
- 金沢吉展・岩壁茂 (2006b) . 心理臨床家の専門家としての発達、および、職業的ストレスへの対処について：文献研究 . 明治大学大学院心理学部附属研究所紀要, 4, 57-73.
- McNeil, B.W., Stoltenberg, C.D., & Romans, J.C. (1992) .The Integrated Developmental Model of Supervision: Scale Development and Validation Procedures. Professional Psychology: Research and Practice, 23, 504-508.
- Orlinsky, D., Ambuhl, H., Rønnestad, M.H., Davis, J., Gerin, P., Davis, M., Willutzki, U., Botermans, J-F., Dazord, A., Cierpka, M. (1999) . Development of Psychotherapists: Concepts, Questions, and Methods of a Collaborative International Study.

- Psychotherapy research : journal of the Society for Psychotherapy Research, 9(2), 127-153.
- Stoltenberg,C.D.,& Delworth,U. (1987) . Supervising counselors and therapists:A developmental approach. San Francisco:Jossey-Bass.
- Stoltenberg,C.D.,McNeil,B.W.& Delworth,U. (1998) .IDM Supervision : An Integrated Developmental Model for Supervising Counselors and Therapists.San Francisco:Jossey-Bass.
- Stoltenberg,C.D.,& McNeil,B.W. (2010) . IDM SUPERVISION: An Integrative Developmental Model for Supervising Counselors and Therapists third edition. New York:Routledge.
- Worthington,E.L.,Jr. (1987) . Changes in supervision as counselors and supervisors gain experience:A review. Professional psychology, research and practice., 18 (3) ,189-208.

Professional Development of Psychotherapists（1）

-The Development of Japanese Supervisee Levels Questionnaire-

UEMURA,Kyoko
Center of Clinical psychology,Meisei University
KOKAI ,Fumiyo
Center of Clinical psychology,Meisei University
IDE,Naoko
Center of Clinical psychology,Meisei University
MINOURA,Ako
Center of Clinical psychology,Meisei University
TAKASHITA, Azusa
Center of Clinical psychology,Meisei University
TABUCHI, Naoko
Center of Clinical psychology,Meisei University
SUSA, Yuko
Center of Clinical psychology,Meisei University

Key Words : developmental models of Supervision, professional development of psychotherapists, clinical psychology practice and training.
